

音韻交替と文法的機能分化・意味分化 ——「破裂音—鼻音」（阻害音—共鳴音）対応——

安部 清哉

キーワード：破裂音、鼻音、音韻交替、文法的機能分化、意味分化、阻害音、共鳴音

1 はじめに

日本語の、特に古代日本での音韻変化（音韻交替）と意味派生とは、密接な関連性があることは、よく知られている。本稿で考察してみようとするのは、いくつかの「破裂音—鼻音（非破裂音）」対応における意味的対応関係の問題である。

さて、音韻交替の事例は多いが、本稿での目的に関わって対象範囲を少し絞って述べれば、子音が同じまま母音交替させた語形や、反対に、母音は同じままで子音交替させた語形によって、同義語・類義語のほか、品詞を超えて、意味的に何らかの関係を認め得る語形を生み出している現象は、古代日本語では、頻繁にということもできるほど、よく見られる現象である。

本稿で取り上げようとする事例は、そのようなものの1つとして、初めて取り上げられると思われるもの、あるいは、これまでほとんど取り上げられてこなかったか、と思われるものである。具体的には、破裂音を（語頭

で) 持つ語形と、その対応形態となる鼻音（非破裂音）語形との対応であり、前者が後者に対してもつ、いわば「意図性・意志性・動作性」「外面性・表出性」などの点での、非破裂音に対して有標的とも見られる特性を持つという問題である。

2 母音交替・子音交替とそれに伴う意味的派生のバリエーション（諸相）

問題とする語形を提示する前に、それらの理解を助けるために、それらをどのような範疇の問題として、取り上げようとしているのか、研究史上の背景の説明として、以下にいくつかの代表的事例を2, 3例示しておくことにしたい。音（韻）変化、音韻交替という現象は、広義には、非常に広い範囲を対象として扱われる概念でもあるが、以下では、本稿に関わる典型例と思われる例を挙げる。

2-1 事例1 母音交替——数詞

例えば、固有語（和語）の数詞に見られる、いわゆる倍数的派生関係は、母音交替の例としてよく紹介される例である。（いま、ハ行を古音の p で表す）。

和語数詞の「ヒ、フ、ミ、ヨ、（イ）、ム、（ナ）、ヤ」（9、10は別系統の語源）は、1から8まで一音節であったと見られる（注1）。そのうち、倍数関係にある次の形態は、共通した子音を元に所謂母音交替によって派生させた語形と見なされている。

1 pi — 2 pu、 3 mi — 6 mu、 4 yo — 8 ya、

2-2 事例2 母音交替——語彙の品詞を超えた派生

古代の日本語では、母音（あるいは子音）を変えるだけの語形変化で語彙を増やしているという語形成の特徴が見られる（古くはそれを「音韻相通」という観念でとらえることがあった）。母音の交替による派生語形成

の例として、例えば、次のような変化が挙げられてきている。

- k-t- コト事—コト（言）葉—カタル語—クチ口—クツワ（轡＝口＋輪）
- k-s- （嗅覚）クサイ臭—クサル（腐る）—クソ（糞）
- k-r- （視覚—暗黒）クライ暗—クロ黒—クレル暮—クリ涅（黒土）
- t-m- （集積）ツム積—ツモル積—タマル貯溜—ツマル詰—トマル留—トム富
- n- （聴覚）ナ名—ノル告—ナル鳴—ナク泣鳴—ネ音—ナリ助動詞（音＋アリとも）
- m- （視覚）メ目—マ目—ミル見—モル守—ムク向—メズ愛—メリ助動詞（目／見＋アリとも）

《親族名称》

- t-t- チチトト—トオさん—（ヲ）ヂさん
- h-h- ハハ—*カカー*—カアさん—（ヲ）バさん
（*「h（<p<*kw）—k）交替」）
- an- an・i 兄—an・e 姉

これらは通常、形態が共時的・通時的に変化する語形変化や音変化としてというより、語を生み出す派生という範疇で扱われている現象である。しかし、別の見方をすれば、日本語は母音を交替させる形態変化によって語形を変化させ、類義語・派生語を（共時的・通時的に）生み出し増やしてきた、ということでもある。

これらは、古くは「五韻相通」「音韻相通」等の名称で把握され、語源解釈などに援用されてきた。「相通観念」は、言わば古代的言語変化観である。子音の方を交替させる派生法も認められる。

- チチ父—チヂ爺、○ハハ母—ババ婆（有声化による派生）

2—3 事例3 母音対応——古代の形容詞における対義語の母音

形態と意味との密接な関係に関しては、前記以外にもいろいろな指摘があるが、次に、母音の広狭の対立についての傾向を挙げる。例えば、古代の色彩語彙アカシ・アラシ・シロシ・クロシの四語での形態については、既に、柴田武（1965）での指摘がある。色彩語彙だけでなく、五感に関わる触覚の温度感覚語彙、味覚における味覚語彙表現の3組の形容詞語彙には、図1のような類型が見られた（安部2007.3b、および安部2011.3参照）。

即ち、これら3組の2音節形容詞4語には、語幹2音節という共通性のほかに、意味的により強い語、より度合いの強さを表すとみなし得る語彙（表の上部の方の語）では、重要度の高い第1音節（頭音法則が働く等）の母音に、開口度が大きく聞こえの大きい（つまり印象の強い）ア母音が現れ、意味的に補助的非優性語彙では対極的な狭いイ・ウの母音が使われているという共通性が例外なく認められる。

基礎的な形容詞語彙に明瞭に認められるこの特徴は、単なる偶然というよりも、古代日本語形容詞の一定の傾向を示していると考えられた。そこで、古代語に限定し、語幹の形態や意味などに限定的条件を付けて、古代語を中心としたク活用形容詞（シク活用語より、より客観的意味を現す）の対義語の対応関係を見てみたのが、表1の1～12の形容詞の対義語である。

ここでは、上記の3組に認められた特徴——第1音節の母音は、アないし対義語よりも開口度の大きな母音となる傾向——が認められた（開口度の広狭は、仮にa、o対u、e、iとに2分類した）。意味的対義関係に、母音の開口度が関わっている傾向（緩い傾向）が認められる。ク活用形容詞における対義関係語すべてに例外なくみられるというわけではないので、緩い傾向という程度であるが（詳しくは安部（2011.3）参照）、一定の傾向性とは見ることができよう。

図1 「五感形容詞語彙」における四語による「2項十字分類構造」（安部 2011, 3）

第1母音	意味機能	視覚（色彩語彙）	触覚（温度感覚語彙）	味覚（味覚語彙）
広母音 a	陽（強）	aka—awo	atu（熱暑）—samu（寒）	ama（甘）—kara（辛塩）
狭母音 i/u	陰（弱）	siro—kuro	nuru（温）—suzu（涼）	supa（酸）—niga（苦）

語彙体系の特徴 ①語幹2音節 ②第1母音と意味の強弱の関連性：「意味的優性=a母音」⇔「意味的非優性=i/u母音」の対立 ③意味的形態的「語彙の階層性」 ④優性語形がより基礎的古語

[3つの基礎語彙に同じ構造がある。二音節四語の対比的母音構造が基本構造の1パターンと見なし得る]

表1 基礎形容詞 ——ク活用2音節語幹対義形容詞の形態対応

NO	対義関係	可計測評価（計・度・性）	陽性・優性	形態	母音	陰性・劣性	形態	母音	備考（甲乙のあるものは乙を下線と斜体で表記）
1	明暗	光度計	明赤し	aka—	A—a	暗し	kura—	u—a	No.1~5が五感感覚の基本語彙
2	温熱	温度計	暑熱し	atu—	A—u	温し	nuru—	u—u	
3	寒涼	温度計	寒し	samu—	A—u	涼む	suzu—	u—u	「涼し」はシク活用
4	甘苦	糖度計	甘し	ama—	A—a	苦し	niga—	i—a	
5	辛酸（辛み度）		辛し	kara—	A—a	すはし（酸）*	suka—	u—a	* スイの古形=安部 2007・2010 参照
6	遅速	速度計	早し	haya—	A—a	遅し	oso—	<u>o—o</u>	「とし（疾）」
7	老若	年齢	若し	waka—	A—a	古し	huru—	u—u	「あらたし（新）」3音節
8	硬軟	硬度計	硬し	kata—	A—a	緩し	yuru—	u—u	「やはし」は下部参照
9	厚薄	厚度計	厚し	atu—	A—u	薄し	usu—	u—u	
10	遠近	距離計	遠し	toho—	<u>O—o</u>	近し	tika—	i—a	
a母音であるが、母音と意味との対比（優劣関係）が現代語とは反対に見える対義語（「浅し」「軽し」がア母音）									
11	深淺	深度計	浅し	asa—	A—a	深し	huka—	u—a	感情の浅い・深いは主観的
12	軽重	重量計	軽し	karu—	A—u	重し	omo—	<u>o—o</u>	
母音が同じaで差が見られない対義語						* 客観的 ※主観的 二母音差なし ≠ 不対応（形態・品詞・年代等）			
1	柔軟二*	弾性・柔軟性・硬度	固し	kata	A—a	柔し	yawa—	A—a	「こわし（硬）」
2	難易二※	難易度	難(かた)し	taka—	A—a	易し	yasu—	A—u	「むづかし」は古くは意味的に対応せず。
3	高安二※	価格	高し	taka—	A—a	安し	yasu—	A—u	金銭評価としては後代

2-4 事例4 母音対立——指示詞の遠称における広母音の有意性

2-3のように、形容詞において、広母音が非広母音に対して相対的に、一定の有標性を持つ傾向があることに気付くようになると、同じく広母音が、指示代名詞において遠称に偏っている傾向に気付く。身近なものでも、アレ、that、那 [na]、[cho]（朝鮮語）、などである。遠称は、遠くのことを指示する行為であるので、使用環境的にも、より聞こえの良い母音（広母音）が、近称・中称よりも相対的に選択されやすいだろうことが、理論的にも推測可能である。

形容詞について考察していた安部（2007）前後に、『言語学大辞典』の各言語の項に当たり、指示語の記載のある言語について相当数の言語を収集しつつ、先行研究での指摘を同時に探索していたところ、同じ問題に着目する研究者はいるもので、既に今井新悟（2004）において、400言語で調査・集計され、統計的にも有意差をもって、遠称における形態の特徴が確認されていることを見出した。安部の上記の印象と同様に、今井（2004）は、

- 【先行論文での結論に疑問を投げかけ】「遠いものを指すときの方が、より高く、大きく、強く発音される方が自然ではないだろうかという疑問がある。」

と問題を改めて提起する。そして、約400言語の指示詞を調査し、以下のように結論付けている。その「まとめ」から引用する。

- 「類型論的な観察から、指示詞の音と距離について、近距離には相対的に高母音が、遠距離には相対的に低母音が使われる傾向があるといえる。遠くを指す指示詞には、口を大きく開けて大きな印象を伴う音を、近くを指す指示詞には口の開け方が小さく、小さな印象を伴う音が使われる傾向がある。口の開口度および音の印象と距離の間に類似性の傾向があると言える。

子音の聞こえの階層と指示詞に現れる子音の間には、類型論的に有

意な相関はなく、両者に類像性があるとはいえない。」（「7. まとめ」）

このように、遠近という意味と母音の開口度との間には、世界的に類型性、類像性（iconicity）があることが実証されている。

（遠近という、全人類に共通する物理的な距離という意味範疇と、先に見た形容詞という、文化的な側面に強く関わる品詞かつ意味範疇とを、直ちに同次元で見るとは毛頭ないが、この今井の指摘は、広母音が狭母音（非広母）音との間において、ある種の対比的使い分けを生み出し得るということに示唆を与えていると思われる。）

さて、これらの音韻交替は、多くは自立語の例であるので、従来、音声音韻の分野か、多くは語彙ないし語構成における語形派生と意味派生の問題として検討されることがほとんどであった。文法的機能にも関わる問題として取り上げられることは少なかった。しかし、それが、助詞・助動詞や接辞の場合には、文法機能に関わる形態素での分化現象ということになり、文法上の問題となる。

以下では、文法的機能の分化にも及ぶ例として、助詞・助動詞の事例を検討してみることにした。

3 音韻交替と文法的機能分化——状態と動作、意図と自然——

音韻交替という現象が、語彙的意味分化だけでなく、文法的機能の分化（派生）としても機能していた段階が認められる。

3-1 破擦—鼻音（非破裂） — 意図性—自然性非意図性

古代語における完了の助動詞として併存していた「つ」「ぬ」には意味の相違があることが知られている。

「つ」は主体の意図・作為によって発生した（ととらえられた）事態の成立、完了の「ぬ」は主体の変化や自然に発生した（ととらえられた）事

態の成立を表していた。それらが接続する動詞が、そのような意図性・作為性の意味を持つ動詞か、それとも、自然発生的事態や主体の単なる状態や変化を表す動詞かが、明らかに異なっており、それらの機能の相違を投影していることが明らかにされてきた。それらが接続する動詞には（〔 〕内は一例）、その意味的なよく表れている。

つ [動詞例：言ふ、返す、隠す、渡す、暮らす]

ぬ [動詞例：老ゆ、過ぐ、成る、忘る、帰る]

また、同じ古代語の助動詞「(ら)る」「(さ)す」にも、同様に、自然的発生か、意図的意志的発生かによる現象把握での相違（対立）が認められ、その点で類似の対と見ることができる。

一方、これらの語、2組における語頭での音声的特徴を見てみると、「破裂・摩擦（ないし破擦＝サ行は一説に破擦音とも）——鼻音・流音（＝非閉鎖系）」という点での対応性が認められる。

さらに、各共通性を一段階上位レベルでとらえなおすと、「t—n 対応」にサ行音，ラ行音も各々加えて「阻害音—共鳴音」対応という対照的關係となる。

(ア)《阻害音》摩擦・破裂＝意図的発生系 tu (つ) / su (tsu) (さ)す

(イ)《共鳴音》流音・鼻音＝自然的発生系 nu (る) / ru (ら)る

つまり、これらの2組の助動詞には、音声（形態）と機能（意味）との間に、共通した一定の相関性を認めることができる。特に、破裂系の音の方が（非破裂音に対して）、意図的ないし意識的行為に関する機能が、選択されやすくなっている傾向がある。

3—2 破擦—鼻音（意図性—自然性非意図性）対応——「t—n 対応」

破裂音と鼻音との間の交替によって文法的機能を分化させたと見なし得

る次の語群がある。

文法の事例を挙げる前に、まず、以下の前半に示した語彙の例を提示して説明し、次に後半に特に構文に関わる助詞・助動詞の例をあげることにしたい。

語基対応 — 破裂音 ———— 鼻音

○語彙

t—n	taka-	(高、垂直卓立)	——	naga-	(長・流、水平平準)
		(高い、高める、 ^な かぶる)			(長い、流す、流れる)
t—n	tobu	(跳/飛ぶ)	——	nobu	(延・伸ぶ)
t—n	taku	(^た 長・ ^た 闊・ ^た 猛く<たける)	——	nagu	(薙ぐ、投ぐ<投げる)
		(縦方向、目立つ方向への卓立)			(横方向)
t—n	tatu	(立/起/発つ)	——	nosu	(延・伸す)

○文法的機能

助詞	t—n	tu	(属格助詞ツ、解釈叙述)	——	no・na	(属格助詞ノ・ナ、実態描写)
助動詞	t—n	tu	(助動詞完了ツ、 意志的動詞に)	——	nu	(助動詞完了ヌ、 無意志的動詞に)
*参考	s—n	su	(suru) (す>為る)	——	naru	(成る)
			(「阻害音—共鳴音」対応)			
	s—r	su	(sasu) (す・さす)	——	ru	(raru) (る・らる)

これらは、形態上、語頭音の子音が、調音点が同じで調音方法を異にする子音間（破裂音—鼻音）で語義分化をなしたと推定される。広義の音韻の「相通」的事例とも見なし得る。これらでの対応を、仮に「t—n 対応（語形）」と呼ぶことにする。「t—n 交替形」とも言えようが、例えば「サビシ—サミシイ」のような「b—m 交替」における「ゆれ」のような入れ替わり現象や、異形態という問題とは異なるので、「交替」より「対応」語形と見るのがふさわしいであろう。

これらの語彙の意味的關係は、上記語彙を一連の語彙的關係と見ると、「垂直方向—水平方向」という相違が認められよう。より抽象化させてとらえなおせば、「卓立的特性—平準的特性」（卓立性—平準性）とでも言い換えられる意味的対応が見られる。

口腔からの呼気による破裂音〔t〕が、垂直・縦方向という文字通り「目立つ」意味特徴の方に当てられている。凹凸や変化を含まない鼻音〔n〕と対照的対比的になっている。文字通り「目」に「立つ」「際立つ」という特色がある。意識がそこにむけられ、注意を向けられたり向けたりすることが、《垂直》《縦》方向の特色ということができよう。語源でもある屹立・出立・出発の意味のほか、その「～立つ」の複合語や慣用句を見ても、垂直方向の意味をもつ「飛び立つ」「毛羽立つ」「浮き立つ」はもちろん、より抽象的な「奮い立つ」「煮え立つ」「書き立てる」「耳に立つ」のように、より積極的な目立つ動きや状態の表現に多用されている傾向が認められよう。

文法範疇においては、機能語の助詞の1つ、属格の格助詞「ツ—ナ（ノ）」に「t—n 対応」がある。ツが使われている事例は、「遠ツ人・天ツ罪、向ツ峰（つかつを）、辺ツ波（へつなみ）」など、下接語の属する場所や性情・属性を表して使われ（参考『時代別国語大辞典上代編』）、表現者が意識的意図的解釈に基づいて限定的に修飾するという性質をもつ事例に使われている傾向が強い。一方、ナは「手ナ末、水ナ処（港）、まナかひ（目ナ交）」など、ナの下接語が上接語の一部分であるという属性の実態を表すのに使われ（参考『時代別国語大辞典上代編』）、客観的に静的に描写する場合に使われる傾向が顕著である（もちろん、いくつかの例外も含む）。そこには、ツの場合のような、積極的意図的な解釈は無用である。

比喩的に抽象化させれば、後者が「自然的実態に即した観察」型描写とすると、対比的に、前者は「認知に基づいた意図的解釈」型叙述であるから、「ツ—ナ（ノ）」は「意図的解釈叙述—自然的実態描写」と見ることができようか。

このように、「人為—自然」と把握すると、日本語表現でよく話題になる「する—なる」における意図的動作と自然的成立との対立概念が思い出される。この2語の音声的形態にも類似性が認められる。スルはt音ではないが、古代のサ行音は、摩擦とも破擦音とも推定され、なにより、ナルが鼻音であることと対比させれば、口腔の呼気による点では破裂tに準じたサ行音であるから、「s (ts) —n 対応」と見なすことができ、興味深い共通性である。

次に、助動詞の「t—n 対応」であるが、完了の助動詞「ツ—ヌ」に見られる対応は、先に3—1で取り上げたように、「tu= 意志的動詞—nu= 無意志的動詞」という「意志—無意志」の対応がある。

これら助詞・助動詞では、t—n 対応は、「[t] 意図・意志 ⇔ [n] 自然・無意志」という点での意味的機能的対立が認められる

サ行音を含めてt、sを阻害音、一方、ラ行音を含めてm、nに、rを共鳴音という範疇でより広くとらえなおすと、これらは「阻害音—共鳴音」対応ということになり、それらに共通する特徴と見ることができる。

これらの対応関係のすべてに共通する意味的要素を定義するのは容易ではないが、呼気を口腔からより強く発声させるt・sの破裂音（阻害音）語彙の方に、柔らかく感じる鼻音（共鳴音）に比して、《外界》への強く明確な意義素性（意図性）を見出すことが可能である。

4 まとめ——追加事例「p—m 対応」（破裂—鼻音）における「外—内」対立

本稿では次の2つの音韻交替と、文法的機能の分化、意味上の分化との対応関係を提示した。

これらの傾向が、本稿での考察のように一定の意味があるとすれば、従来の研究では、b—m 交替（サビシイ—サミシイ）、d—r 交替（鯰鈍—ウロン）、あるいは、o—u 対応どのように、音素1つずつでの1対1の対応

関係にのみ着目してきたが、今後は、音素の対応も、破裂系—非破裂系（鼻音系）、広母音—非広母音（狭母音）のように、「音素 A—非 A」の対応としても把握する必要があるだろう。

1 破擦・摩擦 ⇔ 鼻音・流音（非破裂）

【阻害音 ⇔ 共鳴音】

《意図性・人為性 ⇔ 非意図性・自然性》

2 「t—n」対応

《縦方向・卓立 ⇔ 横方向・平準》

《意図性・人為性 ⇔ 非意図性・自然性》

また、意味の類似性のとらえ方という点においても、もう少し広い関連性も考慮していく必要があることになる。例えば、そのような視点から探索範囲を広げてみると、本文3章には挙げないでおいたが、次のような事例も注目される対応である。

○追加事例（3—3 として）

「p—m 対応」（破裂—鼻音）における「外—内」対応例

p—m pukure-ru (膨^{ふく}・脹れる) — mukure-ru (剥れる)

(外面の拡大・膨張)

(心理的内面の外部出現)

p—m pika-ru (光る) — miga-ku (磨く)

(外への放射)

(内部具有特質の外部出現)

p—m pare-ru (腫^は・脹・張れる) — more-re (漏・洩れる)

(膨張による外面拡大)

(内容物の外部出現)

* 候補 P 音語彙——はぜる (爆)、はげる (剥)、はじける、はだかる、
M 音語彙——まぜる (混)、むける (剥)、

この「p—m 対応」も、破裂音と鼻音との対という点では、上記の「t

「 n 対応」と類似する。破裂音 p 形態における「外面の拡大・外部への出現性」という特性に対して、鼻音 m 形態での「内面に具有する特質が外部へにじみ出る」とでもいうような特性が、対義・対立関係を形成しているととらえることができる。

即ち、同じ破裂—鼻音対応でもこの「 p — m 対応」では、より抽象化させれば「外—内」対応という意味対応が認められる。そこには、破裂音における口腔から外部への直接の呼気流出である p 音と、呼気が鼻腔内部を一旦経由する m 音との身体感覚の相違の投影、という身体論的問題も考慮する必要があるかもしれない。

本稿で取り上げた特徴は、各々形態及び意味的に対が認められる対応語形間に認められる傾向であり、各々単独での破裂音や鼻音は、また個別に吟味する必要がある。その点では、語頭の清濁の対応語形における意味的《有標—無標》（濁音語形のマイナス傾向、例：果てる—ばてる）の場合と類似している。

また、それだけに（またおそらく初めての指摘であるだけに）、この特徴の認定には、いましばらくの検討期間も必要であろう。一方、2—4で紹介した指示代名詞の音声（母音）の特徴に気づいたのは、今井氏及び氏が引いているわずかな海外の研究者（及び安部）程度なのである。本稿で挙げた対応事例は、広義の音韻変化・音韻対応の一傾向を指摘するものとしては、質的量的に十分な（最低限は示している）ものとする。

今後は、より多くの類似の事例を広く探索していくことで、これらの傾向の特性をより明らかにしていく必要がある。

注

- 1) このうち、数詞 1・2 の形態のみ、近年の教科書的テキストの 1 部において、固有形態を一音節とせず、ヒト・フタとするものがあるが（例えば、『図解 日本の語彙』三省堂）、ミツ、ヨツ他での促音部分（イツツのツも）を説明できていない点で不適切であろう。共通部ツ（助数詞）との間に共通してある属格的形態素の存在をまずは疑うべきではなからうか。

【参考文献】

- 安部清哉（2007）「味覚形容詞語彙の歴史と日本語基礎形容詞語彙の類型的構造——スシ・スカシの語源の再検討から——」『日本語史の理論的・実証的基盤の再構築』（平成16—18年度科研費研究成果報告書：代表・金水敏編）、pp.15—28、私家版
- 安部清哉・金水敏共編（2009.11）『シリーズ日本語史2 語彙史』岩波書店（「第1章 語彙史研究と語彙のカテゴリー——その多様性と体系化——」「第3章 意味から見た語彙史」）
- 安部清哉（2010.3）「語彙の諸特性と語彙史研究の課題——「部分語彙」「反現象」「反作用」「中和」——」『人文』8（学習院大学人文科学研究所）
- 安部清哉（2011.3）「形態と意味との相関関係をめぐる語彙論的諸相——「ク活用2音節対義形容詞の形態的対応」を添えて——」『学習院大学文学部研究年報』57
- 安部清哉（予定稿）「音韻史」『日本語の音（日本語ライブラリー）』朝倉書店、第3章
- 今井新悟（2004）「指示詞における類像性：きこえの階層に関して」『日本認知言語学会論文集』4、pp. 351-360
- 柴田武（1965）「言語における意味の体系と構造」『科学基礎論研究』26